

家のない子の心になって

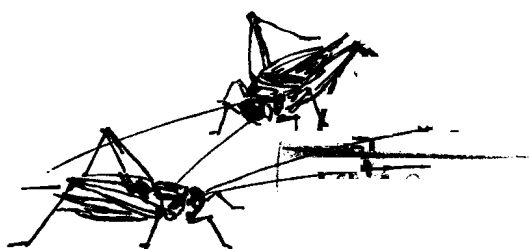
阿 貴 良 一



家のない子の心になつて

阿 貴 良 一





NDC 913

8093-064010-7764

ポプラ社の創作文学 10

家のない子の心になって

定価 五五〇円

著者 阿貴良一 あきりょういち

発行 昭和四十五年五月三十一日 ©

発行者 久保田忠夫

発行所 株式会社ポプラ社

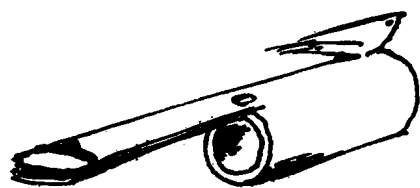
東京都新宿区須賀町五(一六〇)
振替東京一四九二七一

印刷 新興印刷製本株式会社

製本 石毛製本株式会社

著者との話しあいにより検印は省略します。
落丁・乱丁本はいつでもおとりかえします。

はじめに



この小説は、父母と別れ家を失った少女中平タミ子なかつひらが、その悲しみに耐えながら、そこそこ境遇の移りゆく姿を、少年タケシの目で描くといった形の物語である。

タケシの父は黒部川くろべがわに造られた第四ダムよんだむの建設技師で、その作業所でタミ子という少女を知った。そのとき、タミ子はタケシと同じ小学校の五年生であったが、黒四ダムの完成した年、中学二年の夏で作品は終わっている。だから一九六〇年から六三年（ダム完工の年）がこの物語の経過した四年間である。

もしこの作品の主人公の中平タミ子と、山本タケシやまもとのふたりが、元気に成長していれば、一九七〇年のことはそれぞれ大学の三年（タミ子は一年遅れたので大学二年）ということになる。ひょっとするとタミ子は、時田画伯ときたがにつれられてフランスにいて、パリの大学へ通っているのではないだろうか。

もうすぐ夏、パリのマロニエの咲き匂う日も近い。

もくじ

家のない子 6

黒部くろべにて 19

二つの教材費 31

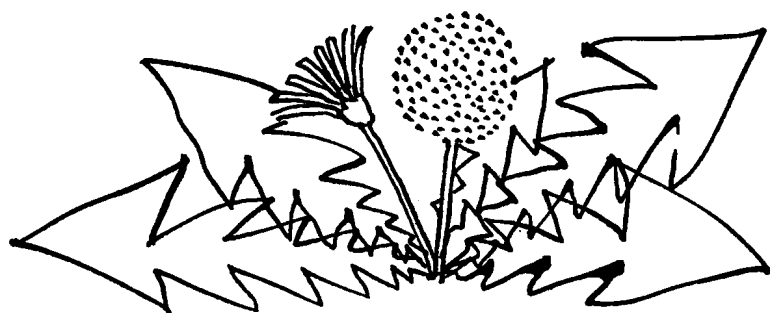
お誕生たんじょうパーティー 47

訪おとずれた女 63

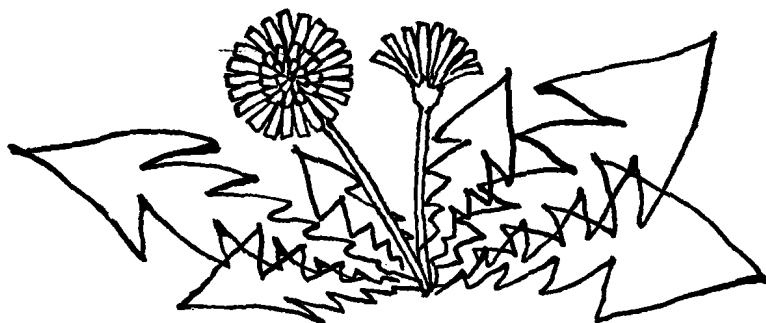
少女像 A・B 77

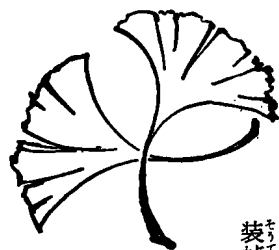
崖下がけしたの男 92

三つの宝たから 108



あとかぎ	262	茅が崎の夏	245	宝去軒	230	野の花	213	春告げ鳥	193	十万円の煙	179	谷間のユリ	159	金賞・銀賞	142	タミ子の手紙	129
------	-----	-------	-----	-----	-----	-----	-----	------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	--------	-----





装幀・さし絵

岡本半三

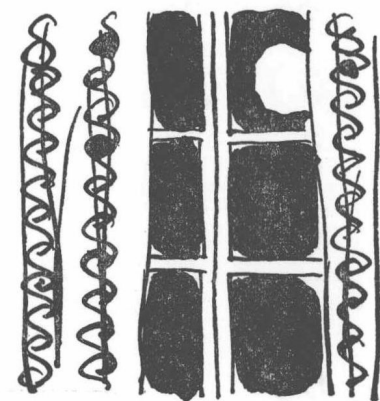
家のない子の心になって

阿貴良一



家のない子

学校の作文の時間に、『わたしの家』という題が出されたとき、中平タミ子はあたえられた作文用紙にこう書いた。



「……わたくしには、家がありません。わたくしのおかあさんも、二どめのおとうさんも、いまはいないからです。

わたくしのほんとうのおとうさんは、小学二年のとき病気で死にました。三年生のとき、おかあさんはべつの男の人のおよめさんになりました。わたくしはその人をおとうさんとよぶことになったのですが、お酒のみでらんぼうもののこんどのおとうさんは、すきではありませんでした。

工事場ではたらくこんどのおとうさんのしごと場がかわるたびに、しず岡・ぎふ・山がたとうつりすんで、いつも親子三人ははんば（飯場）ぐらしのため、三年生からは、学校にいかないときもずいぶんありました。

とやまけんのくろべ（黒部）にいたとき、五年生の夏休みのまえ、わたくしのおとうさんとおかあさんは、わたくしをおいて、どこかへ行ってしまったのです。くろべでははんばの食事をつくる

しごとをしていたおとうさんが、ある晩、人とけんかして、その人にけがをさせ、お金までぬすんで、にげていきました。

おまわりさんが、しらべにきました。わたくしはおそろしかったが、きらいなおとうさんなので、いなくなってもかなしくはありませんでした。すると、それから一週間して、こんどは、おかあさんがどこかへいってしまったのです。おかあさんは、おとうさんがけがをさせた若い男の人と、いっしょににげたのです。

わたくしをひとりおいて、いなくなったのですから、おかあさんはわたくしをすてたのでしょう。それからは、わたくしの家はなくなりました。いつか読んだどうわのだいに、『家なき子』というのがありました。わたくしも家のない子です。」

この作文を読んだ担任の先生からぼくの母に、一度学校にきてほしいとの呼び出しがあった。その日、学校へ出かけた母は、夕方おそくあたりが暗くなりかけたころ、もどってきた。

へやの隅で、タミ子は寝ころんだまま、月刊雑誌を読んでいた。ぼくは机に向かって復習をしていたが、母がタミ子のことで学校に呼び出されたのが気にかかり、ろくすっぽ勉強も手につかないでいた。帰ってきた母に、そっとたずねると、『わたしの家』というあのタミ子の作文を見せてくれた。

母とぼくが、こっそり話し合っているのを、タミ子は気にもとめないようすであった。

タミ子の身の上については、母もぼくもよく知っていた。知ったうえで、困っているタミ子を引きと

って預あづかかっているのだが、タミ子の秘密はぼくたちだけのないしょにして、だれにも知らせないほうがよいと考えていたのだった。

「困こまってしまっただわ。親類の子を預かっているってことにしておいたのでしょうか。タミ子ちゃんの正直しょうじきはいいんだけど、先生にほんとうはこうなんですよと、あらためていいにくかったわ。」

母は、タミ子の方を見ながら、半分つぶやくようにいった。

「でも、先生はわかってくださったの。……これは先生だけのことにします、学校でのことは引き受けましたって。」

そういったあと、母は氣をかえたように立ち上がった。

「タミ子ちゃん、おなががすいたでしょう。すぐ支度しどするわね。」

そのままエプロンに手を通すと、お勝手にはいつていったが、「あら、どうしたの、おやつはそのままじゃないの。」という母の声が聞こえた。

ぼくは、タミ子におやつをやることをわすれていた。

どこかで鳴らすテレビのテーマ・ソングが聞こえている。

タミ子がぼくの家に引きとられたのは、この八月のことであった。五年生のぼくと、同じ学年の生徒として転校の手続きをとったのだが、そのときぼくはずいぶん悩なやんだものだ。

タミ子のそれまでの生活は、ぼくたちの生活とはひどく違ちがっていたはずで、それが姿すがたや心にも現われていた。新しくはいってきた転校生を見る目は、だれにかぎらず好奇こうき心にみちたもので、そのはね返り

を、タミ子に代わって、ぼくが当然受けとめねばならぬはめとなった。

「へえ、きみの親類の女の子だっていうのだろう。もっとしゃきつとしてるのかと思ったよ。ところがだ、あれ、なんていうのかな。」

ある日、校門を出ていくタミ子のうしろ姿を見つめていた友だちが、わざわざぼくを追ってきて話しかけた。すると、べつの友だちが横から口をはさんだ。

「トウモロコシっていうのだよ、あれ。外をおおっている皮がざらざらしていて、それにばさっと赤い毛がたれているだろう……」

タミ子の艶つやのわるい、赤茶けた髪かみの毛のことをいっているのだ。

「ああ、その感じだな。それにあの話し方……」

「いなかっぺい、というのだよ。」

そのまま聞いていると、もっとひどいことをいうだろう。ぼくは、耳をおおいたい気持ちで友だちから離はなれ、大急ぎでかけもどったあの日のことが思い出された。

たしかにぼく自身も、はじめはタミ子に、みんなと同じような感じを持っていた。

転校してきたタミ子が、二組のほうにまわり、同じクラスでないことに、ほんと安心したのはぼくだった。そして、同じ家において、同じ学校に通いながら、いっしょにいくのをわざと避さけている、それもぼくなのだ。

家にいるときは、けっこう親しくしながら、学校にいるときのタミ子には、友だちの目を気にして遠

くに離れて^{はな}いる。そんな二重人格^{にじゅうじんかくてき}的なじぶんの気持ち^{きもち}が、解決^{かいけつ}されないでいるとき、学校へ母が呼^よび出されたのが、あのタミ子の作文であつた。池に投げこまれた小石のように、その波紋^{はもん}はぼくの頭の中でひろがっていった。

夕食を待つま、タミ子はぼくたちから離れたかつこうで、テーブルの上で教科書をひろげていた。ぼくは、また作文のことを考えつづけていた。

——タミ子は正直^{しやうじき}なのだ。正しくものを見て、正しく語る、それが正しさに通じる。ぼくはそれを見落^{おち}としてゐるのではないだろうか、と。

三人が夕食のテーブルに向かつたのは、七時をまわっていた。

ぼくの父は、黒部^{くろべ}の電源開発の工事場の技師^{ぎし}をしていた。この二年ほどは、現場勤^{げんばんど}めのまま、年に二、三度家に帰ってくるだけで、このところは母とぼくのふたり暮^ぐらしだし、タミ子を加えても、三人きりのさびしい食事^{しょくじ}だつた。食べ物も、ぼくやタミ子の口に合うようにつくられていた。いつもぼくがこのんで食べる魚のフライが、皿^{さら}の上につっていたが、空腹^{くうぷ}のはずなのに、今夜はそれほど食欲^{しょくよく}が起こらなかった。

ガラス窓^{まど}のカーテンのあいだから、月がさしこんでいた。十月を迎^{むか}えると月の光にも急に秋が深まつたという感じがして、その影^{かげ}を青く淡^{あは}く映^{うつ}していた。

食^くべはじめからしばらくたって、タミ子が箸^{はし}を置いた。

「おばさん、すみません。わたしは悪いことをしました。」

そういつて急になぎだしてしまった。

ぼくはすぐ、母の学校ゆきのこと、そして、あの作文のことだと気がついた。

「どうしたの、お食事中に……びっくりするじゃないの。」

母は、わざとおどけたような声を出したが、タミ子は顔に手を当ててなきじゃくっている。

ぼくも食事の箸を置いた。タミ子のとりにすわっている母は、肩を抱くようにして、ハンカチで涙をぬぐってやっていた。

「おばさんがね、きょう学校へいったのはね、タミ子ちゃんのことよ。でも、気にするようなことじゃないの、ね。」

「いいえ、わたしが作文にあんなことを書いて、それで……。わたし、あの作文の題を見たとき、どうしようかと思ったのです。でも、書かずにはいられなかったのです。わたしの胸の中に、いっぱいまとっていたことなのです。」

タミ子の目からは、ぬぐってやるあとから、涙が吹き出していた。

「いいんだよ、かあさん。……タミ子がね、あの作文を書いたことは正しいんだよ。」

さっきまで、ぼくの胸の中でもやもやしていたものが、急に声になった。

「ぼくたちが、おていさいばかり考えているのがいけないんだよ。タミ子のことを思ってるみたいで、じぶんのつごうを考えているんだよ。かあさんは、そう思わない……。ぼくも、ほんとうは、タミ子のことをたいせつに考えていなかったのかもしれない。」

ぼくの思っていることを、そのまま話してしまった。そして、話しているうちに、じぶんの心の中にたまっていたオリのようなものが、きれいに洗い清められていくような気がした。

「タケシのいうとおり、これからは、もっとタミ子ちゃんのことを考えてあげましょうね。タミ子ちゃんを親類の子だということより、ほんとうに愛してあげられるか、どうか、……そこだわね。」

母もなにかを感じているのだろう、タミ子を抱きかかえている指先が、細かくふるえていた。

食後、母はリンゴをむいてくれた。さっきの話し合いで心が通じ合ったはずなのに、なにかまだみょうに解け合ぬものが残っていた。それは、ことばだけで終わるものではなく、これからの生活のなかで、解決しなければいけないのだろう。

タミ子はさっぱりしたような顔で、皿のリンゴをほおぼっていた。電燈の光のはずれにいるタミ子の横顔に、月の光がガラス戸越しに写っている。

タミ子がほんとうのことを書きたかったという、あの作文の『わたしの家』の一節が、また思い出された。童話の本で読んだ『家なき子』よりも、もっとなまなましく感じられたのは、じぶんを家のない子と案じているタミ子が、現実にも目の前にいるためであろうか。

ぼくたちの家に、いっしょに住んでいるあいだだけでも、タミ子を『家ある子』にしてやらなければいけないと、ぼくはリンゴを食べながら考えていた。

母は、テーブルのそばの雑誌を手にしていたが、ふと写真のページを指さした。それは色刷りで、美しい服に身を包んだ少女の写真であった。

「かわいいわね。」

といって、タミ子の方にさし示した。

新しい子ども服のスタイル写真なのだろう。

「タミ子ちゃんは、こんな洋服はほしくない。」

「いいえ。」

タミ子には興味がないらしかった。

「あら、そうそう、さっきのことでわすれてたわ。」

母は立っていくと、買い物紙包みを持ってもどってきた。

「これよ。」

母は、もどかしそうに紙包みをほどこいた。ピンク色のナイロンのスツケースが出てきた。

「もうすぐ修学旅行でしょう。タミ子ちゃんにと思って、買ってきたのだけど。」

タミ子は、ちょっと目をやったが、手に取ろうとはしなかった。

「うちには女の子がいないので、どんなのがいいのかわからないのよ。でも、これ、かわいいと思うて。」

母はタミ子の方へおしやったが、まるでそれをよけるように、からだを固くしている。そして、

「わたし、遠足へはいきません。……いいんです、お金ありませんし。」

といった。

あんな話のあとで、母が買ってくれたものに、すなおに手が出ないのかと思っていたが、タミ子はべつのことを気にしているのだった。

「だいじょうぶだよ、……お金のことなんか。」

と、ぼくがいうと、そのことばに母がつけたした。

「そうよ。タケシといっしょですもの、タミ子ちゃんも、わけへだてて考えてはいけないわ。」

この秋の修学旅行は、千葉県の鋸山のこぎりやまに出かけることになっていた。

「一組でもみんながいくんだよ。ふたりほどいけないという生徒がいたけれど、その生徒だって、学校からお金が出て、いくことに決まったんだもの。」

ぼくは、たとえのつもりでその話を持ち出したが、すぐへんなことをいいたのに気がついた。お金のことや、じぶんの境遇きようぐうのことを、いちばん気にしているタミ子が、このことばをどう受けとったろうか。

ピンクのスーツケースは、電燈の光に明るく輝かがやいている。タミ子は、やはりだまっただま身かたを固かたくしていた。

ぼくは、なんだか気づまりのようで、テーブルを離はなれると、じぶんの勉強べんきやうべやに引きあげた。しばらくして、うしろのフスマがあいた。タミ子だった。近よってくると、

「タケシさん、わたしお願いがあるんです。」

みょうにあらたまった声で、机つくえのスタンドの明りに、顔をつき出すようにしていった。